

へカリキュラム改革のキーワード

試験・評価・単位制度

試験、評価は学校制度の誕生とともに古いが、単位制度は戦後、いわゆる新制大学から始まる。占領軍アメリカのCIEを通じてアメリカの大学制度が移入さ

れたが、単位制度もその一つであった。本家アメリカでは、選択教科がうまくきたとき、学科目と学生の学修との等価性という擬制的前提のもとに、単位制度が生まれた。一八七〇年代のことである。試験・評価・単位制度は、大学の教育のあり方を左右する教育制度・システムであり、カリキュラムの実質をなす仕組みである。単位制度には構造的欠陥があり、空洞化しているとも言われてきた。問題の核心は大学教育のあり方であり、学生をいかに学ばせるかが原点である。大学の「入口」ばかりが問われ学習の内部過程や成果が不問にされる学校歴社会では、「優」の数も何を学んだかも社会的意味をもたない傾向を生む。こういう社会で大学教育、学生の学びをどう再生させるか、これが三つの言葉の生きた意味である。

大学設置基準の旧・新において、一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもって構成するという点は

同じである。この内部構成は従来は、一時間の授業に対し二時間の学生自身による学習を必要とするとされていたが、新省令はこの点を大学裁量にゆだねやや弾力化した。つまり、四十五時間（一単位）のうち授業（講義、演習）は、十五時間から三十時間の範囲内で各大学が定める。実際には、従前より一講時を九十分とする授業がモード（標準）で、これを十五回実施して二単位を与えるとすれば、設置基準からみれば75%程度の時間量しか授業していないとなるが、新省令もこれにふれず従来どおりである。

単位制度の空洞化とは、一時間の授業に対して二時間の学生による学習がなされていない事実をさす。これは学生の怠慢だけが問題ではない。むしろ講義だけの授業をし、その内容で試験をし、それだけで評価しておわりという、学生の自主的学習を組織しえない授業や大学の教育運営が問われるのである。これを解決するには、①自習室・図書館の拡充、②

マスプロ授業の改善、教員数の増大、③チューター制など個別指導体制づくり、④教授法の改善、⑤教育内容の質的向上など総合的・全一的改革が不可欠である。これらはスクール化といわれるが、管理主義化でなく、学問の共同化が要である。

（新村洋史・中京女子大学）